

相手意識・目的意識をもって話したり聞いたりできる子の育成

－「エピソード報告会」の実践を通して－

豊田市立市木小学校 後藤明日香

1 はじめに

本学年の子供たちはおしゃべりをするのは好きだが、人前で発表することに対しては苦手意識をもった子供が多くいる。また、人前で話すことが好きだという子供もスピーチや発言のときの声の大きさは小さくなってしまふ。その反面、友達の見解や発表を聞くことが好きな子供が多い。話すときや聞くときに大切なことは何か尋ねると、「相手を見ながら話す」「うなずきながら聞く」と、これまでの学習で低学年程度で身に付けるべきことは理解はしている。しかし、中学年で身に付けたい「相手を確認しながら間を取って話す」「自分と比べながら、同じだと思ったことや、違うなと思ったことをもとに、感想を話し合う」ことが身につけていない子供がほとんどである。また、これまでスピーチをする機会はあったが、資料を活用した発表や報告の経験が少ないのも事実である。

そこで、本校で進めている総合的な学習の時間で行う、「二分の一成人式」と関連させ、調べた10年間の自分史の中からエピソードを報告する発表会を言語活動として設定する単元構想を考えた。4年生に求められている相手や目的に応じた話す・聞くの能力をつけることができると考えたからだ。今までの自分のことを報告することで相手意識や目的意識が明確になり、調べ学習を進めていくことで家族への感謝の思いが芽生え、よりしっかり伝えたいという思いが強くなると考えた。また、エピソード報告会をすることで聞き手は友達のことを自分のことと比較しながら聞きたいという気持ちをもつことができるのではないかと考えた。よい話し方や聞き方の方法を知らせ、繰り返しスキル練習することで話す・聞く力を習得していくとともに、人前で自信をもって話ができるようになってほしいという願いをもって実践に取り組むことにした。

そこで、本単元のテーマを「相手意識・目的意識をもって話したり聞いたりできる子」の育成とし、総合的な学習の時間と関連させながら研究を進めていくことにした。

2 実践の計画

(1) 目指す子供像

- ・資料を効果的に使いながら、分かりやすく話すことができる。また、相手に話が伝わっているか確かめたり、話す速さや間を考えて話したりすることができる。
- ・相手の話していることと自分のことを比べながら聞くことができる。

(2) 研究の仮説と手立て

めざす子供像を明確にするため、次の仮説と手立てを設定し、研究を進めることにした。

仮説1

単元構想を工夫して、子供に相手意識や目的意識をもたせれば、意欲的に話したり、聞いたりしようとする態度が育つであろう。

- ① **手立て1** 総合的な学習「見つめよう10年間のぼく・わたし」と関連させた単元構想を設定する。

総合的な学習では「二分の一成人式」を行う。総合で今までの自分について調べたことを資料として、国語科ではエピソード報告会を開き「話すこと・聞くこと」の力を育てることにした。最終的には国語科で学んだ「話すこと・聞くこと」の力を生かして「二分の一成人式」で堂々と自分の言葉で「決意の言葉」を発表する子供になってほしいと願った。

② **手立て 2** 教材「報告します、みんなの生活」で資料を使った報告会の発表方法を学ぶ。

教材文「報告します、みんなの生活」を活用して、資料を使って報告する時の「話し方」「聞き方」を知り、発表方法を学ぶ。自分のエピソードを紹介する際には、より具体的な資料・年表等があるとわかりやすいことに気づかせる。

③ **手立て 3** 書くことと話すことの関連

総合的な学習の時間等で集めた情報をもとに、発表原稿を書くことで、分かりやすい話し方ができるようにする。また、原稿は字数や決められた時間内に発表するなど条件をつける。

仮説 2

ペア、グループ、学級など多様な場を設定して、話す・聞くスキルを行えば、相手意識・目的意識をもって話したり、聞いたりすることができるであろう。

① **手立て 1** 帯学習によるスキル学習

声を出すトレーニングをはじめ、ペアやグループなど多様な形態で発表する場を設定して、相手や目的に応じた話し方や聞き方を練習する。

② **手立て 2** 自己評価・相互評価による振り返り

ペアやグループでの発表練習では、自己評価や相互評価をして、手直しすることを見つけ、お互いに高め合う。

3 指導の実際

(1) 10年間の自分をみつめ、エピソード報告会をしよう

(仮説 1 手立て 1)

本校では、4年生の総合的な学習の時間を使って「二分の一成人式」を行っている。その目的は、「① 10年間の自分を振り返り、『自分らしさ』や『自分のよさ』に気づく」「②自分を支えてくれている人々に感謝の気持ちをもつ」「③これからの自分の生き方を考える活動を通して、将来への希望をもち、なりたい自分になろうとする意欲を高める」の3つである。

「二分の一成人式」では、大勢の保護者の前で、これまでの自分を振り返り、「決意の言葉」を壇上で一人一人発表する。4年部の教員は、どの子供も自信をもって相手に伝わる話しぶりで「決意の言葉」を発表してほしいという願いをもった。そこで、総合的な学習の時間で調べた10年間の自分の中からみんなに一番伝えたいエピソードを選び、そのエピソード報告会を開くことを単元を貫く言語活動として設定した。その言語活動を通して「相手意識・目的意識をもって話し、聞く力」を育てたいと考え、総合的な学習の時間と関連づけた単元構想を立てた。

(2) 学習計画を立てよう (仮説1 手立て1)

教師の実際の過去の体験談を実物という資料を使い発表することで、自分のことを発表したいという目的意識がもてるように導入を工夫した。「資料があったほうが出来事が伝わってくる」「原稿を見ていないで発表していたので気持ちが伝わってくる」という感想があがり、資料を使うよさと、原稿を見ないで話すよさに気づくことができた。また、「私もなにか資料をもってきて話したい」「友達の話も聞いてみたい」と言う子供がでてきた。さらに、過去にあった出来事、今頑張っていること、将来の夢について知りたいという意見があがった。そこから、総合的な学習の時間で調べている自分の名前の由来・当時好きだった物・その歳でできるようになったことなど自分の成長について発表することを決めた。そこで、「二分の一成人式」と関連づけて「自分の10年間の中での一番のエピソード」というテーマを決め、学年で発表会をすることを子供とともに話し合い決定した。この話し合いで子供は、学年で自分のことをみんなに発表するという相手意識と資料をつかって報告するという目的意識をもつことができた。学習計画をつくることにかかわった子供たちは主体的に学ぶ姿勢ができたと思う。



「実物を使っている発表」

(3) エピソード報告会に向けて教材文から発表の方法を学ぼう

(仮説1 手立て2)

教材文「報告します、みんなの生活」は分かりやすい報告の仕方だけでなく、効果的な資料を作るためにアンケートをとったり、その結果をまとめたりといった内容にもふれられている。しかし、本実践では、報告における話すこと・聞くことの指導事項に絞って指導をすることにした。

今までの経験から話し方としては、「相手を見て」「間を取りながら」という意見が出てきた。資料を使うということが初めてなので、資料を使ったよい発表の条件を導き出せるように、教師が意図的により話し方と粗悪な話し方を示し、資料を使った発表をするためにはどのようなことが必要か考えさせた。「資料を見る間が5秒くらいあったからじっくり見ることができた」、「資料をみんなに見えるように動かしていた」、「資料の見てほしい部分を指してどこをみればよいかわかった」という意見から、資料を使ったよい話し方を導くことができた。また、報告するときの話し方として「この〇〇を見てください。」「〇〇からわかるとおわり」「〇〇によると」という言葉を使うと分かりやすくなることを知らせ、常に意識できるように掲示をすることにした。

「次にもいいですか」	「〇〇によると」	「〇〇からわかるとおわり」	「この〇〇を見てください」	報告するときを使う言葉集
------------	----------	---------------	---------------	--------------

聞き方としては、「相手の方を見て」「うなずきながら聞く」ということは

出てきたが、中学年でできるようにになりたい、「質問や感想を発表するとき、自分と比べて発表する」「相手が一番伝えたいことは何か考えながら聞く」ということは教師が付け加えた。教材を通して発表方法を理解した子供は「早く発表したい」「写真を探してくる」と発言し、意欲が高まったことが伺えた。

(4) 帯学習によるスキル学習 (仮説2 手立て1)

これですわたしの発表を終わります。	思ったこと			わかったこと			くわしい様子								エピソードの紹介						
	いと	わ	大	を	た	飲	院	は	す	な	つ	母	く	て	こ	表	い	た	は	こ	今
思	た	切	自	か	し	み	に	お	で	お	て	が	だ	い	こ	を	ド	も	こ	こ	か
っ	し	に	分	け	は	物	に	酒	に	酒	い	気	さ	ま	の	指	を	の	れ	こ	ら
つ	も	さ	の	つ	は	が	連	を	半	の	た	づ	い	し	こ	す	話	で	こ	こ	ら
て	、	れ	十	た	コ	好	れ	飲	分	び	そ	く	。	。	ろ	。)	し	。)	こ	こ	ら
い	今	て	年	思	て	ん	く	ん	う	と	二	。)	わ	。)	。)	こ	こ	こ	ら		
ま	よ	い	間	い	の	だ	だ	ら	で	で	わ	才	の	し	は	。)	こ	こ	こ	ら	
す	り	た	を	ま	だ	わ	わ	い	し	。)	し	の	こ	。)	。)	。)	こ	こ	こ	ら	
	も	の	ふ	す	と	し	そ	へ	を	と	が	の	ろ	。)	。)	。)	こ	こ	こ	ら	
	も	だ	り	。	分	は	う	っ	と	も	一	の	。)	。)	。)	。)	こ	こ	こ	ら	
	っ	と	返		り	は	っ	て	。)	あ	生	わ	。)	。)	。)	。)	こ	こ	こ	ら	
	と	家	つ		ま	。)	。)	い	。)	と	け	た	。)	。)	。)	。)	こ	こ	こ	ら	
	家	族	わ		し	。)	。)	。)	。)	あ	ん	命	。)	。)	。)	。)	こ	こ	こ	ら	
	を	大	た		。)	。)	。)	。)	。)	げ	に	に	。)	。)	。)	。)	こ	こ	こ	ら	
	大	切	だ		今	。)	。)	。)	。)	た	何	。)	。)	。)	。)	。)	こ	こ	こ	ら	
	切	に	か		の	。)	。)	。)	。)	時	か	。)	。)	。)	。)	。)	こ	こ	こ	ら	
	に	し	ら		わ	。)	。)	。)	。)	に	を	。)	。)	。)	。)	。)	こ	こ	こ	ら	
	し	た	ち		ら	。)	。)	。)	。)	は	す	。)	。)	。)	。)	。)	こ	こ	こ	ら	

この学年は全体的に人前で話すことがあまり得意ではない子が多いため、毎日の帯学習の時間を使って、教師が作った原稿(モデル文)を使い、練習することにより話すことに多少抵抗がなくなるだろうと考えた。ただスキル練習を行うだけでは力にならないと考え、ペアで聞き手・話し手を交代して行い、お互いに評価表を使って評価することにした。評価の観点を明確にしたことにより、話し手はどのようなことに気をつけて

「教師のモデル文」



「ペアでの練習」

話せばよいか考えながら話すことができ、聞き手のどの部分に着目すればよいか理解することができた。

最初、話し手は原稿を読むことで精一杯であったが、

2/5	2/4 (B)	2/3 (B)	2/2 (B)	2/1 (B)	2/0 (B)
話し手は原稿をよみながら話すことに抵抗がなかった。	話し手は原稿をよみながら話すことに抵抗がなかった。	話し手は原稿をよみながら話すことに抵抗がなかった。	話し手は原稿をよみながら話すことに抵抗がなかった。	話し手は原稿をよみながら話すことに抵抗がなかった。	話し手は原稿をよみながら話すことに抵抗がなかった。
聞き手は話し手の話す内容を聞き取ることができた。	聞き手は話し手の話す内容を聞き取ることができた。	聞き手は話し手の話す内容を聞き取ることができた。	聞き手は話し手の話す内容を聞き取ることができた。	聞き手は話し手の話す内容を聞き取ることができた。	聞き手は話し手の話す内容を聞き取ることができた。
話し手は原稿をよみながら話すことに抵抗がなかった。	話し手は原稿をよみながら話すことに抵抗がなかった。	話し手は原稿をよみながら話すことに抵抗がなかった。	話し手は原稿をよみながら話すことに抵抗がなかった。	話し手は原稿をよみながら話すことに抵抗がなかった。	話し手は原稿をよみながら話すことに抵抗がなかった。
聞き手は話し手の話す内容を聞き取ることができた。	聞き手は話し手の話す内容を聞き取ることができた。	聞き手は話し手の話す内容を聞き取ることができた。	聞き手は話し手の話す内容を聞き取ることができた。	聞き手は話し手の話す内容を聞き取ることができた。	聞き手は話し手の話す内容を聞き取ることができた。

「評価カード」

繰り返し練習し、聞き手に評価をしてもらうことで、少しずつでも上達したいという気持ちをもって取り組むことができた。また、聞き手は最初のころはただ「大きな声だった」と態度面の感想を述べるだけであったが、「家族に大切にされていることが分かった」「私はそんなことはなかったのでびっくりした」というように内容について自分と比較しながら感想を伝えていることが、子どもの評価カードからも分かる。

(5) エピソード発表の内容を考えよう (仮説1 手立て2)

帯学習で話すこと・聞くことに慣れてきた子供たちは自分のことを発表することに目が向いてきた。「早く自分のことを話したい」と思うようになってきた。「自分の10年間の中で一番のエピソード」で話す視点を考えさせるために、子供たちに「友達のどのようなことが知りたいのか」と聞いた。子供から「何歳の時のこと」「実際におこったこと」「そのときの詳しい様子」「分かったことや思ったこと」が意見として出た。そのことについて「もっと詳しく家族に聞かないと分からない」という子供がでてきた。そこで「自分のことだけでなく、家族の気持ちも聞くといいよ」とアドバイスをした。子供がこのエピソード報告会を行うことで家族への感謝の気持ちをもつためにも家族とふれあい、家族の自分への思いを確認することが大切だと考えた。

(6) 発表資料の作り方と発表の方法を考えよう

(仮説1 手立て2)

10年間の一番のエピソードを発表することになり、相手に伝わるような効果的な話し方、資料はどうあるべきか話し合った。アンケートをとってグラフや表にまとめることが教材文で扱われていたが、子供たちは当時の状況を伝えるには、実物やその時の様子がわかるような絵をかくなどを効果的な資料として考えた。「総合で調べたことを使えないかな」と問いかけると、年表を作れば10年間のことがよく伝わるのではないかとの意見がでて、10年間の年表にすることになった。エピソード報告会では、総合的な学習で作った自分の10年間の年表を資料として使うことを確認した。その他に各自考えた資料を持ってくることを確認した。実際の資料として一番多かったのは写真であった。その他には実物を持ってくる子供もいた。写真については拡大して、資料として見やすくなるように教師が支援した。

明るく元気な
私の十年間

生れ時	6ヶ月	1才	2才	3才	4才	5才	6才	7才	8才	9才	10才
よく泣いた。とても元気でぶじに生まれた。48.5cm, 2830g	つかまり立ちをした。したときがすごいと喜んでくれた。	一人で歩けるように。2回もびょうきに。初めてびょうきに。	一人でスプーンをもって、ごはんを食べるのにちょうせん。	いろいろなことをおぼえる。パパのものまねをするように。	パパとママと会話できるようになった。ぐんばって会話をした。	ブランコで一人で遊ぶことができるように。みんな仲良しになった。	市小小学校に入学。すぐにみんなに話しかけると、すぐに友達に同じようち園の子はもと仲良しに。	ドッチボールが大好きになった。男の子にも勝つことができるように。わかまを言うのが少なくなり、たまんを少しだけせきりうにな。た。人でおつかいも行けるように。	サッカーにめざめた。お父さんにいっくんわさを教えてもらった。サッカー部に入る。ボールを使って練習をしている。		

「児童のつくった年表」

(7) 発表原稿を考えよう (仮説1 手立て3)

話すことが苦手な子供には、いきなり発表することには抵抗がある。そこで、報告用の発表原稿を書くことにした。前時に話し合った話す視点について確認してから取り組ませた。子供たちは、病気や怪我をして家族に心配をかけたことや1歳のときに毎日お母さんと歩く練習をしたことなどをエピソードとして選んだ。それは家族に苦勞をかけた、感謝したいという思いがうまれてきたからである。エピソード文は2分で話し終わることと、原稿用

病院に行、てよか、た。

この写真を見てください。七さいの時のわたしは、総合で調べたわたしの十年間を年表にしたものです。その十年間の中で一番のエピソードを話します。七さいの時のことです。

この写真を見てください。七さいの時のわたしは、総合で調べたわたしの十年間を年表にしたものです。その十年間の途中で一番のエピソードを話します。七さいの時のことです。

「児童の発表原稿」

紙600字までという条件をつけた。普段文章を長く書きまとまりがなくなる文章を書く子ども、エピソードにまつわる伝えたい事実や思いの要点をしっかりと絞って伝わるような文章を書こうと、自分で何度も推敲をする姿がみられた。また、総合的な学習で調べたことをもとにエピソード文を書く活動を取り入れたのでスムーズに取りかかることができた。原稿をもとに早速、暗記しようとする子供もでてきた。

それは、単元の導入で原稿を見ない方がより相手に伝わるということを学んだからである。いつもは話すことに自信のない子供でも原稿があるので、まずは原稿を読むことからはじめ、抵抗なく話すことへつなげることができた。

（8）グループで発表練習をしよう（仮説2 手立て1）

エピソード原稿が書け、資料を持ってきた子供たちは「早く発表したい」という気持ちが高まった。学年でのエピソード報告会の前に、まずはグループで自分の発表練習をすることにした。年表と自分の持ってきた資料を使って報告するのは初めてなので、どのように資料として活用するとよいか戸惑っている子が多くいた。そこで、資料の活用が上手な子にみんなの前でスピーチをするモデル学習を取り入れた。「見てほしいところを指し示していた」「指すだけではなくて強調していた」とよいところを見つけ、さらに強調するには「丸く囲む」「なぞる」「2度指す」などの方法をみんなで考えた。お互いに発表を見合い練習していくことで、資料に注目したか確認するにはどうしたらよいかを自分で考え、「見ましたか」「もういいですか」と聞き手に確認するようになる子供が出てきた。また、それを見て他の子供も資料の見せ方を工夫するようになってきた。

『今日はちょっと資料を指していない、相手を見ていないと言われたので、次の報告会では、ちゃんと間を取って、相手を見て話したい』のような振り返りから、報告会を成功させたいという意欲化に繋がっていることがわかる。

（9）学年でのエピソード報告会をしよう（仮説2 手立て1）

学年で行うということで、グループで発表練習をしたときより緊張感があったが、今までの練習を生かし、資料を指し示したり、間を取ってエピソードを紹介したりすることができた。資料（写真）を見せようとしたときにうまく見せることができなかつた子が「また後で写真は見せません」と相手を意識して、臨機応変に対応をすることができるようになった。



「資料を使って発表」

(10) 自己評価・相互評価による振り返りをしよう (仮説2 手立て2)

発表に対する達成感を味わったり、今後の発表に対する課題を見つけたりすることができるように、必ず振り返りを行った。発表の態度・聞く態度についての良い点やアドバイス、内容についての感想や質問を書くための評価カード(付箋)を使用した。付箋は、聞き手は書いてすぐに相手に渡すことができ、話し手はどのような評価をしてもらったのかということを知ることができるという利点がある。次回の発表練習でどのようなことに気をつけて行えばよいのか、評価カードによって目標を明確にもつことができた。さらに、自分ができていることを認めてもらい、次への意欲を高めることができた。グループ発表では年表を持つ役割を作り、年表を持つ子が聞いている子の態度を評価するようにした。この付箋による評価は、教師が評価するのにも有効な手立てであると感じた。

4 研究の成果と今後の課題

(1) 成果

- ・総合的な学習と関連した単元構想を工夫し、単元を貫く言語活動として「エピソード報告会」を設定した。「二分の一人成人式」にむけて10年間の自分を見つめ直し、家族への感謝の思いをもった子供は、自分のエピソードを話したいという気持ちをもつことができた。また、友達はどんな10年間を歩んできたのか知りたいという気持ちが高まり、自分と比較しながら報告を聞くことができた。
- ・スキル学習を通してお互いにアドバイスをし合うことで、声の大きさ、間の取り方、話す速さなどより相手を意識して発表し基本的な話す力を伸ばすことができた。また、資料を指しながら話すということができるようになったり、相手に確認をしながら臨機応変に話を進めたりするなどの発展的なこともできるようになった。単元の事前に行ったアンケートでは人前で話すことが嫌いだと言っていた子供が、単元の最後に行ったアンケートに「前は人前で話すことが恥ずかしかったけれど、少し恥ずかしさがなくなって、人前で話すことが少し好きになった」と変容がみられた。
- ・発表練習で評価カードを使い、相互評価を行ったことにより、次への目標を明確にもったり、自分のできている部分を認めたりすることもできた。

(2) 課題

- ・スキル練習においては話すことが主であったため、聞き方の練習をあまりすることなく報告会になってしまった。そのため、自分と比べながら聞いたり、一番大切なことは何か考えたりしながら聞くことの練習が不十分となってしまった。
- ・学年での報告会であったため、個々の発表の把握をすることが十分でなかった。相手意識や目的意識の評価について本単元では付箋で評価したが、よい手立てがないか今後研究していきたい。

グループ発表の評価カード (二組 名前)

評価する側(聞き手)	評価される側(話し手)
相手の話し方が上手で、わかりやすかった。	相手を見ているとき、目を合わせて話していた。
話のスピードがちょうど良かった。	自分の話したところは、しっかりと聞いてくれた。
質問や感想をたくさん言ってくれた。	わたくしは心配したが、みんなに聞いてもらえたので良かった。
自分の話に興味を持って聞いてくれた。	最初は緊張したが、みんなのおかげでスムーズに進めた。
話が面白かった。	自分も積極的に発言することができた。
話し手との関係が築けた。	自分の話の内容が伝わったと思う。
自分の話に興味を持って聞いてくれた。	自分も積極的に発言することができた。
話し手との関係が築けた。	自分の話の内容が伝わったと思う。
自分の話に興味を持って聞いてくれた。	自分も積極的に発言することができた。
話し手との関係が築けた。	自分の話の内容が伝わったと思う。

(評価者)

「グループ発表の評価カード」